



TITLE:

来賓挨拶(<特集>「第1回大学教育改革フォーラム:日本の大学教育を
どうするか」の記録)

AUTHOR(S):

草原, 克豪

CITATION:

草原, 克豪. 来賓挨拶(<特集>「第1回大学教育改革フォーラム:日本の
大学教育をどうするか」の記録). 京都大学高等教育研究 1995, 1: 5-5

ISSUE DATE:

1995-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53473>

RIGHT:

来 賓 挨 拶

草 原 克 豪 審議官（文部省高等教育局）

京都大学に設置された高等教育教授システム開発センターによる第一回の大学教育改革フォーラムが開催されるということで、文部省を代表して喜んでお祝いにかけつけました。

皆様ご承知のように、いま大きな大学改革が進んでおります。大学審議会の答申にもとづくものですが、この大学改革のねらいは三つにまとめられると思います。第一は高等教育の個性化、特に学部レベルでのカリキュラム改革を通じた教育機能の強化です。第二は教育研究の高度化であり、特に大学院の質を高め、同時に規模も拡大すること。第三は生涯学習ニーズへの対応、つまり、大学を単に若者だけのための世界にしておくのではなく、誰もが人生の好きなときに好きな勉強ができるような場にしようということです。

大学を良くしようという試みは、もちろん今回が初めてのことでなく、これまでも何度も行われてきました。しかし、今回進められている大学改革にはこれまでの試みと比べて際だった特色がいくつかあります。中でも重要なのは、これまではどちらかというと大学の制度面をどう改善するかという観点からの議論が多かったのに対して、今回は単なる制度論を越えて教育の中身、つまり内容や方法にまで踏み込むような改革になっている点です。特に一般教育と専門教育の垣根を取り払ったことによって、カリキュラムの見直しや改善が求められるようになり、現実に各大学で真剣な取り組みが行われているのです。

カリキュラムの改革が進むと、こんどはそれに基づいて毎日の授業をどのように展開していくかという具体的な課題が生じてきます。この点については、日本の大学は問題だらけといっていいでしょう。以前からも、「このままではいけない」、「もっといろいろな工夫をしていかななくてはならない」といった指摘がありました。それがだんだん強まってきております。ある種の危機意識が盛り上がってきているのです。このような危機意識に応える形で、京都大学においていち早く高等教育教授システム開発センターという組織が設けられたということは、大学改革を促進するうえで極めて意義の深いことであります。

そのように重要な役割を負ったセンターで、本日第一回の大学教育改革フォーラムが開催される運びとなりました。実りある議論が展開されることを期待しております。ご参加の皆様も、この場での議論を参考にしながら、それぞれのご自分の大学において、教育の内容や方法を改善していくためにさらにご尽力くださるようお願いいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。